

佐土原キリスト教会・2023年5月7日聖日礼拝・説教

聖書箇所：マタイの福音書1章18～25節

説教題：神共に在す

私達が使っている「新改訳聖書」の「第1版」を大淀教会の牧師をしておられた先生が翻訳されたという話を以前から聞いていました。数年前の「百万人の福音」にその本間正巳先生の証がありましたが、証の中に奥様の話がありました。高齢になられてアルツハイマーを病まれたようです。イギリスで暮らしておられるお嬢さんも心配して時々帰って来られましたが、お母さんの様子を見てショックを受けます。全く別人のように変わってしまっていた。しかしある日、そのお母さんが突然祈り始められたのです。「色々なことが分からず、物事が上手に出来ない自分の不甲斐なさを赦して下さい…それでも、こんな私を愛して、導いて下さるイエス様に感謝します…これからの私の降りて行く道を、なだらかな道として下さい」。お嬢さんはびっくりしました。抜け殻のようになってお母さんの心の奥底に神様が愛して下さっているお母さんの人格がある、神が共にいて下さる、そう気づくのです。奥様にとっては試練でしょう。しかし正にそこで、奥様は神様と出会っておられるのです。神は信仰者とどこまでも共にいて下さる方である、そのことを教えられた証でした。

「神は私達と共にいて下さる」、それをヘブル語に直すと「イム・マ・ヌウ・エル(インマヌエル)」—(「イム」は「共に」、「ヌウ」は「私達」、「エル」は「神」)—となります。そしてここで生まれるイエス様こそ、私達にとって「インマヌエル」である方。イエス様を通して、神は私達と共にいて下さるのです。感謝なことです。

今日の箇所は、その「インマヌエル」なるイエス様の誕生について語る記事です。主人公はイエス様の父となるヨセフです。この箇所を通して、信仰の恵みに迫りたいと思います。

1：主イエス誕生の語りかけ①～「神の恵み」

イエス様の誕生の記事ですが、この箇所の中心的な出来事は「ヨセフが夢を見る場面」です。夢というのは私達の心の深いところにある心理を反映していることが多いそうです。私達も経験することです。ヨセフにも、夢にまで見るようになっていた深い悩みがあったのです。それは「婚約者のマリヤが子供を宿している」ということでした。ヨセフは、誰にも言えずに苦しんでいたのです。19節「夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた」(19)。「正しい人」、「掟に従って結婚までは体の関係を持っていなかった」と言うことです。それにも拘らず婚約者が子を宿したのです。どんなにマリヤを愛していても、そのまま結婚するにはあまりにも大きなことでした。ヨセフは「夫」と呼ばれています。ユダヤでは婚約は結婚と同じ重みを持っていて公に宣言されました。婚約を解消する時も、通常は理由を公にして離縁を宣言するのです。そうするとマリヤは「婚約中の夫がいながら姦淫の罪を犯した」として石打の刑です。公の場で「申命記22章」が読まれて、石が投げられるのです。ヨセフは傷つきながらもマリヤの命だけでは守ろうとした。理由を公表しないで「私の勝手に婚約を解消します」ということにしようと決めました。そうすると「子供を宿らせておいて落ち度もないのに離縁するとは何事か」と世間から非難されます。その非難を受けてでもマリヤの命を守ろうとした、それがヨセフという人でした。後にイエス様が『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい」(マタイ9:13)と言われましたが、正に憐れみに生きようとしたのです。

しかしそれは、悩んで苦しんだ果ての決断だったでしょう。だからこそ、夢にまで見たのです。しかし彼の夢に天の使いが現れて、事の真実を告げるのです。ある人が「神様ももっと早く言って下されば、ヨセフはこんなに苦しまなくて良かったのに」と言いました。でもヨセフは、この経験を通して神との交わりを経験するのです、その信仰が成長するのです。神様は、私達も同じように取

り扱われるのではないのでしょうか。三浦綾子さんは「苦難の中でこそ、人生は豊かなのです」と言いました。苦難の中でこそ神を経験するからではないのでしょうか。いずれにしてもヨセフは、言うならば、深い悩みの中で神と出会うのです。ある神学者が言いました。「人は誰も、他の人に知らせることが出来ない心の片隅を持っている。そこには、誰にも言えない秘密があるかも知れない、恥じていることがあるかも知れない、辛い罪責感があるかも知れない、深い悩みがあるかも知れない、悔しさがあるかも知れない。しかしその誰にも知らせることの出来ないような心の片隅で、人は神に会うのだ」。正にヨセフは、一人で悩んで苦しんでいる、そこで神に会った、そして神の導きを受けたのです。ヨセフは神に出会うことが出来たのです。このことは私達に何を語るのでしょうか。

ストラボンという学者が、世界中の民族を調べて回りました。その結果「世界中のどの民族も『神』を持たない民族はない。人間は何者かを拝もうとしている」、彼はそう言いました。旧ソ連にブレジネフという指導者がいました。ソ連が「神を信じない」思想を謳っていた絶頂期です。でもブレジネフが死んだ時、奥さんは彼の遺体の上で十字を切ったのです。思想や哲学ではどうしようもないものがあるのです。「神なんか信じない」と言っている人も、イザとなったら「神様！」と叫ぶと聞きます。本来、人は神を求めるのです。それにも拘わらず、どうして人は神をもっと近くに感じる事が出来ないのでしょうか。

聖書は「人の罪が私達を神から遠ざけるのだ」と言うのです。具体的な罪もそうですが、人間には妬みや自己中心があります。「原罪」という、私達の魂を毒しているどうしようもないものがあるのです。その罪が私達を神様から遠ざけるのです、仕切りなのです。ここでイエスは「この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です」(21)と、「この方こそ罪の問題を解決して下さい」と言われているのです。どうやって解決して下さいのか。20～21節に「ダビデの子ヨセフ。恐れないうあなたを妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい」(20～21)とあります。これは神がヨセフに「マリヤの産む子を自分の子として迎えて欲しい」と頼んでおられるということです。その意味でイエス様は、ヨセフに「自分の子」として迎えられた方なのです。「ヨセフに迎えられた」とは、どういうことでしょうか。

1章1節～17節の系図の最後に「ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた」(16)とあります。そのヨセフに、イエス様は迎えられたのです。それは言うならば、イエス様は、ヨセフに繋がるころの人間の歴史の中に入り込んで下さったのです。その系図は、名君と謳われるダビデ王さえ、家臣の妻を奪ってしまったことを記す、人間の罪深さを描く系図です。イエス様はその人間の罪の歴史に入り込み、人間の罪を全部引き受けて十字架に架かり、私達の罪に下るはずの罰をご自分が受けて、私達の罪の問題を解決して下さいました。そうやって神様と私達の間に橋を架けて下さったのです。神と私達の仕切りは取り除かれました。誰でも、イエス様を信じるなら、神様と繋がる事が出来るようになったのです。苦悩の中で神に会えるようになったのです。いや、苦悩の時だけではない、「神われらと共にいます」、神がいつも私達と—(あなたと)—共にいて「あなたを強め、助け、守って下さる」、そういう時代がイエス様の誕生で始まったのです。だからヨセフは、神に出会った。それがヨセフの夢が教えることです。

1人の姉妹の証を「百万人の福音」で読みました。この方は、マスコミの仕事に夢中になっていた28歳の時、突然、難病に襲われました。全身の神経障害、麻痺が呼吸筋まで広がり、呼吸が出来なくなりました、死に直面したのです。これまで、人を押しつけてでも仕事に邁進する生き方をして来ました。神様から「お前はそれでよいのか」と問われていたのです。そんな時の病気です。彼女は「神が招かれた時には『ハイ、ハイ』と言って天国に行ける」と思っていました。ところが、現実には死に直面した時には、「今死んだら何もならない、死にたくない」と叫んでいる自分があるので

す。彼女は涙を流して祈りました。「神様、どうかもう一度いのちを与えて下さい。そうしたら今度は、喜んで天国に行けるような生き方がしたいのです」。祈りは聞かれ、奇跡的に呼吸が出来るようになりました。しかし医者からは「一生寝たきりの生活を覚悟して下さい」と言われます。しかしそんな中で、なぜか生きる意欲が甦るのです。神様の御業です。リハビリに励んだ結果、手足の麻痺は奇跡に回復し、5か月後には杖をついて歩けるようになります。彼女は、病気の人を抱える精神的な悩みがいかに大きいかを知って、快復した後、そういう人の心を支えるソーシャルワーカーの道に進むのです。彼女は言います。「人生は一寸先に何が起こるか誰にも分かりません。しかし…行き詰まったように見えても…神様に祈り求めるなら、次の道は既に備えられていることが分かるのです…あの朝、私に再起のいのちを下さった神様は、どんな状況の中でも共におられ、『私がついてるよ』と語りかけ、励ましてくださるのです」(藤井美和)。

『その名はインマヌエルと呼ばれる』(…神は私達たちとともにおられる、という意味である)」
 (23)。誰の人生にも、自分の力ではどうにもならないことがあります。でも私達は、苦悩の中で神に出会い—(神に触れられ)、神と共に生きて行くことが出来るようになったのです。悩みの中で、弱さの中でこそ、神に会えるということは、どんな時にも望みを捨てなくて良いということではないでしょうか。神が何かをして下さるといふ希望、この問題は神に在って意味があるという希望、それを持つことが出来るということではないでしょうか。イエス様の誕生によって、神が共にいて下さるようになった、それが、この個所—(イエスの誕生)—の語りかけです。

2 : 主イエス誕生の語りかけ②～「神の招き」

この個所にはもう1つの語りかけがあります。「神の招き」です。

この後ヨセフはどうしたのでしょうか。イエスを自分の子として身に引き受けました。ベツレヘムに行き、イエスの生まれる宿を探して歩きました。イエスがヘロデ王に狙われた時には、エジプトへの長い旅を、身を挺して守ったのです。何の権力もない大工です。神は、その彼に「私の子を守ってくれ、引き受けてくれ」と委ねられたのです。そしてヨセフは「神と共に働く者」とされたのです。神の方から始めて下さった恵みの歴史です。しかしヨセフは、そのようにしてその歴史を荷う人間として、神の恵みの歴史に入り込むことが出来たのです。この個所は、「あなたも神と共に生きて行けるようになったのだ」と恵みを語ります。しかしそれだけではなくて、私達をも、「あなたにも神の恵みの歴史を荷って欲しい—(神と一緒に働いて欲しい)」と招くのではないのでしょうか。

「神の恵みの歴史を荷う—(神と共に働く)」、お一人ひとり、既にそれぞれ置かれた場所で神の愛に生き、恵みの歴史を荷っておられることでしょうか。祝福をお祈りします。色々あると思いますが、数年前来て下さった佐藤彰先生が下さった冊子にあった1人の姉妹のことをご紹介します。

この方は、70歳を過ぎてから乳癌の大手術を受けた後、「まだ動く指をもって主に仕えたい」とワープロを購入して、それで教会の奉仕を始めたそうです。その姿が痛々しいので、役員会が助言しました。「姉妹、あなたは病身です。奉仕をせずに療養して下さい」。その姉妹は涙を流して「私から奉仕を取り上げないで下さい」と訴えたそうです。佐藤先生も「この人は倒れる瞬間まで奉仕をするつもりなのだ」と悟って、もう何も言わなかったそうです。その生き方には色々な意見があると思いますが、でも、恵みの歴史を荷おうとする思いが伝わって来る気がします。またその方は、亡くなる半年ほど前、自分を導いてくれた宣教師に再会するためにアメリカの田舎町の教会を訪問しました。そこでこう語ったそうです。「皆さん、この先生を日本に遣わして下さい。本当にありがとうございます。私は、様々な辛いこともありますが、今は福音の力をしみじみと実感しています。私の体内には4つの癌があります。けれども死ぬことが全く怖くありません。それは先生が私にキリストの福音を伝えて下さったからです。皆さんも、もしイエス様の本当の力を知りたいとお

思いなら、癌になってみて下さい」。どんな人でも、例外なくたった1人にならない時があります。それはこの世を去る時です。しかし、イエス様を信じる者は、その時にも「神が私と共にいて下さる—(神共に在す)」、そのことに全てを委ねることが出来るのです。何と素晴らしいことでしょうか。

さて、佐藤先生は、その宣教師の目に涙が光っているのを見て、「このたった1人の日本人に会うためにでも、日本に行ってよかった」、その涙がそう語っているのを感じたそうです。そして、神の福音は、その姉妹から、家族へ、隣人へと、伝わって行ったのです。彼女は、生涯、神の証しに生きてそうです。神様の恵みを証しすること、それも神の恵みの歴史を荷うことではないでしょうか。

申し上げたように、神と一緒に働く(労する)、神の栄光を表す、神の恵みを表す、色々な形があると思います。神の愛に生きることもそうです。このように神への礼拝を守ることも、既にその働きです。いずれにしても、無理をする必要はありません。でも、どんな形でも良い、私達も神の恵みの歴史を荷わせて頂きたいと願うのです。なぜなら「どんな時にも神が私と共にいて下さる—(神共にいます)」、私達はこんな素晴らしい祝福を頂いたからです。私達が気づかない時でさえも、神は共にいて下さるのです。それに何かお応えしたい、そう願うからです。詩篇の詩人も詠いました。「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか」(詩篇 116:12)。それだけでなく、そこにこそ、尽きることのない生きる意義、生きる上での張り、色あせない人生の価値のようなものもあるのではないかと思うからです。

聖書には「イエスがもう一度、地上に来られる」という「再臨」の約束が預言されています。やがてイエス様が、空の扉を開けて入って来られるのです。その時、イエス様から「よくやった。良い忠実なしもべ—(として生きたな)」(21)と言って頂けたら、どんなに幸いでしょうか、どんなに大きな喜びでしょうか。